１．若中年成人における孤立性収縮期高血圧と循環器疾患死亡との関連, NIPPON DATA80

研究協力者　久松　隆史（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学　准教授）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）
研究分担者　大久保孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座　教授）
研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　准教授）
研究協力者　近藤　慶子（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　助教）
研究分担者　喜多　義邦（敦賀市立看護大学看護学部看護学科　教授）
研究分担者　早川　岳人（立命館大学衣笠総合研究機構地域健康社会学研究センター　教授）
研究協力者　神田　秀幸（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学　教授）
研究分担者　岡村　智教（慶応義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　教授）
研究分担者　岡山　明　（合同会社生還習慣病予防研究センター　代表）
顧　問　　上島　弘嗣（滋賀医科大学アジア疫学研究センター　特任教授）
NIPPON DATA80 Research Group

【背景】

孤立性収縮期高血圧（収縮期／拡張期血圧≧140／＜90 mmHg）（ISH）は高齢者によくみられる高血圧病型であるが、若中年者における知見は乏しい。本研究の目的は、30 から 49 歳までの若中年成人における ISH と循環器疾患死亡リスクとの関連を検討することである。

【方法】

NIPPON DATA80は1980年国民栄養調査対象者のコホート研究である。無作為抽出された日本全国300地区からの参加者のうち、循環器疾患の既往がなく降圧剤を内服していない30から49歳までの一般成人4776人（平均年齢39.4歳、55%女性）を分析対象とした。血圧は5分以上の安静後水銀血圧計を用いて座位にて測定した。高血圧治療ガイドライン2019の血圧値分類に基づき、対象者を以下の高血圧サブタイプに区分した：正常血圧（収縮期/拡張期血圧＜120／＜80 mmHg）、正常高値血圧（120-129／＜80 mmHg）、高値血圧（130-139／80-89 mmHg）、ISH、孤立性拡張期高血圧（＜140／≧90 mmHg）、収縮期拡張期高血圧（≧140／≧90 mmHg）。Cox比例ハザードモデルを用いて、年齢、性別、喫煙、飲酒、BMI、血清総コレステロール、糖尿病を調整し、高血圧サブタイプと循環器疾患死亡との関連を評価した。

【結果】

分析対象者4,776人中、ISHを389人（8.1%）に認めた。29年の追跡期間中、全循環器病死亡115人、冠動脈疾患死亡28人、脳卒中死亡49人が確認された。ISHを伴う若中年成人は、正常血圧の者と比較して、高い循環器疾患死亡リスクを有していた（調整ハザード比［95%信頼区間］4.10［1.87-

9.03］）。ISHと循環器疾患死亡との関連は、孤立性拡張期高血圧（3.38 [1.31-8.72]）と同程度であり、収縮期拡張期高血圧（5.41 [2.63-11.14]）ほど高くはなかった。ISHと冠動脈疾患・脳卒中死亡との間にも有意な関連を認めた。男女別および年齢階級別（30-39と40-49歳）の層別解析においても同様の結果を認めた。

【結語】
若中年一般成人における長期追跡の結果、ISHは独立して循環器疾患死亡のリスク増加と関連していた。

***J Hypertens*. 2020;38(11):2230-2236.**